国語科学習指導案（２年）

平成25年11月７日（木曜日）第５校時(13:35～14:25)　卓球場　指導者

１　**単元名　筆者の論理の展開について考えよう**（教材名　「モアイは語る　－地球の未来」ほか）

２　考察

(1) **教材観**

①学習内容：学習指導要領上の位置付け

・「C読むこと」：イ「文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。」

・「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」：イ(オ)「相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開に違いがあることを理解すること。」

②伸ばしたい資質・能力

・文章の構成に着目しながら読み、文章全体と部分との関係をとらえる力

・文章中の事実や根拠を的確に読み取り、筆者の意見を理解する力

・例示の効果について考える力

・文章を基に自分の考えをまとめる力

③単元を貫く言語活動の設定と言語活動の特徴

・言語活動例イの「説明や評論などの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること。」を基に、本単元では、同じ題材をテーマとした二つの説明文を読み、地球環境に関わる筆者の主張に対する自分の考えをもたせる。

・説明文を複数読むことは、文章の構成や主張と例示の関係等をとらえ、論の展開について比較して考えながら、文章の内容を理解することや自分の考えを深めたり、広げたりすることができ、本単元の言語活動として適している。

④教材文の特徴

・本単元の主教材である「モアイは語る」は、序論・本論・結論の典型的な三段構成になっている。序論で提示された「モアイ像とイースター島の謎」という問題を、本論において、筆者の研究データとその的確な分析を基に、「モアイ像の語る文明崩壊のなぞ」という形で解明していく。そして、そのイースター島のたどった歴史が、現代の地球環境を悪化させている人類・地球の未来への警鐘という筆者の主張へと結び付けていく。つまり、序論・本論の内容全てが、結論である筆者の主張を裏付ける例示となっている構成である。

・補助教材として、鷲谷いづみ著「イースター島にはなぜ森林がないのか」を取り上げる。この副教材は、主教材と同じくモアイ像と森林消滅の関係について三段構成で述べられており、筆者の主張を裏付けるための例示が本論に複数示されている。しかし、両者の主張には若干の違いがあり、それぞれの筆者の主張とそれを裏付けるための例示の共通点と相違点を比較することによって、例示の効果について考えさせることができる。

⑤必要な指導・活動

・接続詞や文末表現に着目し、事実と意見、主張と根拠の関係を視覚的にとらえさせる。

・小グループでの話し合いの場を設定し、意見交流をさせてから発表をすることで、自分の意見に自信をもって発表できるようにさせる。

⑥今後の学習の活用

・書くことの領域「立場と根拠を明確にして書こう」において、自分の意見とそれを支える説得力のある根拠を、効果的な構成を考えて意見文にまとめる学習。

・説明文「月の起源を探る」（３年）で、図や小見出しの効果に注意して読み、論理の展開をとらえる学習。

(2) **本単元に関わる生徒の実態及び指導方針**（男子２２名、女子１７名　計３９名）

①既習の学習内容

・１学期の説明文「やさしい日本語」では、各段落を要約して全体をつかんだ後、接続の言葉に着目して、全体と部分の関係や事例を把握し、全体の構成をとらえる学習を行った。

・評論文「君は『最後の晩餐』を知っているか」では、言葉や表現の工夫などに注意して、筆者のものの見方や考え方を読み取る学習を行った。

②実態及び指導方針

・半数ほどの生徒は文末表現に着目し、事実と意見を区別して読むことができるが、本文に色分けしたサイドラインを引かせることで、更に問題提起と例示、主張をとらえやすくする。

・筆者の主張と例示の関係をとらえにくい生徒が多いため、補助教材と比較させることで、それぞれの筆者がどのように論理を展開し、主張を支える効果的な例を挙げているかをとらえやすくする。
・段落同士のつながりを考えることができている生徒も多いので、特に主張と例示の関係を接続詞に注目して読み取らせることで、例示と主張の関係を更につかめるようにする。
・文章の内容について自分の考えをもつことは多くの生徒ができるが、しっかりと考える時間を確保し、少人数グループでの意見交流を行うことで、更に考えを深められるようにする。

3　単元の目標

文章全体と部分の関係をとらえ、主張の根拠となる例示に着目し、筆者の論理の展開について考えさせる。

4　指導計画（全８時間予定）

評価規準	国語への関心・意欲・態度	評論の文章を読んで内容について考え、自分のものの見方や考え方を広げようとしている。
	読む能力	評論の文章を読んで自分の考えを述べるために、文章全体と部分との関係や例示が文章の中で果たしている役割を考え、内容の理解に役立てている。
	言語についての知識・理解・技能	相手や目的に応じて、文章の展開に違いがあることを理解している。

時間	過程	伸ばしたい資質・能力		主な学習活動	関	読	言
		活用させたい知識等	思考力・表現力等				
第１時	課題把握	・形式段落および、三段構成の知識	・文章の内容を大まかにつかむ力	・主教材文を読み、本単元における自分の課題を設定する。	○		
第２時～第６時	課題追究	・接続語、指示語の知識 ・文末表現に関する知識 ・問題提起とそれに対する答えの呼応についての知識	・文章の構成をつかむ力	・文章構成に着目し内容のまとまりを捉える。			○
			・問いと答え、事例と意見を読み分ける力	・イースター島の文明が崩壊した理由からを考え、本論の内容を読み取る。		○	
			・事例と要旨の関係をとらえる力	・序論・本論と結論との関係を読み取り、筆者の主張とその根拠を捉える。		○	
			・文章の構成をつかむ力 ・問いと答え、事例と意見を読み分ける力 ・事例と要旨の関係をとらえる力 ・筆者の意見を理解する力 ・例示の効果について考える力	・補助教材を読み、文章構成を捉え、本教材との共通点、相違点を探してワークシートに書き出す。		○	
				・二つの文章を読み比べ、、筆者の主張に対する例示の効果について考える。（本時）		○	
第７時～第８時	まとめ	・文章構成の知識（序論・本論・結論）	・例示を効果的に利用する力	・主張に対する意見を身近な例を示しながら400字程度の文章を書く。 ・書いた文章を読み合い、自分の考えを深める。 ・単元の学習を振り返り、論理の展開についての考えや身に付けた力、その力を生かせる場面などについて文章でまとめる。		○	

5　本時の展開　（６／８）

(1) ねらい　　二つの文章の違いを整理し、少人数グループによる意見交換を通して、筆者が主張を伝える上で用いている例示の効果について考えを深めさせる。

(2) 準　備　　本文プリント（２枚）、ワークシート、付箋紙（２色）、発表用模造紙

(3) 展　開

学習活動	時間	指導上の留意点及び支援・評価
＜本時の課題を把握する＞ 1　二つの文章の違いを整理し、筆者が主張を伝える上で用いた事例の効果について考えることを知る。 二つの文章を読み比べ、例示は主張を伝える上で、どんな効果があるか考えよう	２分	・前時までに学習した二つの本文プリントを振り返り、本時のめあてを確認する。
＜課題を追究する＞ 2　グループに分かれ、前時に付箋紙に書き出した例示の共通点と相違点を整理する。 ・イースター島の文明が崩壊した原因として森林伐採を挙げている点が共通している。 ・ころや船を作るために森林を伐採したという点が共通している。 ・「モアイは語る」には人口増加と耕地面積の問題が具体的な数値で表されている。 ・「イースター島にはなぜ森林がないのか」にはラットの存在と生態系の変化が原因として挙げられている。	５分	指示･･･グループに分かれて、付箋紙に書き出した二つの文章の例示の共通点と相違点を模造紙に貼り付け、情報を整理しよう。 ・事前に本文プリントに問題提起、例示、主張を色分けしたサイドラインを引かせ、それぞれを区別しやすくさせる。 ・前時に書かせておいた例示の共通点と相違点の付箋紙を発表用模造紙に貼り、グルーピングさせる。 ・どのグループでも話し合いが充実するよう、付箋の数の少ない生徒から発表させる。 ・特に例示の相違点に注目させ、筆者の主張の根拠となる理由に目を向けられるようにする。
3　相違点に挙げられている例示の効果について考える。 ・それぞれの筆者の主張と根拠の関係は相違点に注目すると比較しやすいな。 ・「モアイ」 　人口の増加について具体的な数値を使うことで、読み手に危機感を与える効果がある。 ・「イースター島」 　ラットの例を使うことで、人間が森林破壊に与えた影響の大きさを感じさせる効果がある。 4　グループでの意見交流をして、例示の効果についてまとめる。	２０分	発問･･･それぞれの文章の例示には、どんな特徴があり、読み手にどんな印象を与えているか考えよう。 （補･･･相違点として挙げられている例示は、主張を伝える上でどんな効果があるのだろう。） ・例示の共通点については、根拠としての信憑性が高いという点について補足説明をし、今回は相違点に着目するように指示する。 【読】主張の根拠となる例示に着目し、例示の効果について考えている。 （観察、記述）
5　グループでまとめたことを全体の場で発表し、情報を共有することで、例示の効果と筆者の主張との関係を確認する。	２０	・グループの意見を発表用模造紙にまとめ、提示することで、学級全体で共通点や相違点を確認しながら考えを整理していく。 ・グループの発表の中で類似していることや関係

	分	性のありそうなことについて、生徒に質問したり、説明させたりして例示の効果に対する考えを深められるようにする。
＜本時のまとめをする＞ ワークシートに本時の授業で学んだことを書くことで、本時の学習を振り返る。 ・筆者が主張していることの根拠を考えることで、例示と主張の関係がつかめるな。 ・読み手に自分の伝えたいことがしっかりと伝わるように、例示の仕方や効果まで考えて文章が書かれているんだな。	３分	・本時の学習について、例示と筆者の主張の関係という視点で振り返らせ、説得力のある例示について確認する。 ・次時は、筆者の主張に対する自分の意見を文章化することで全体のまとめとすることを伝える。

６　板書計画

（前半）

課題　二つの文章を読み比べ、例示は主張を伝える上で、どんな効果があるか考えよう

「モアイは語る」（拡大本文）

「イースター島にはなぜ森林がないのか」（拡大本文）

（後半）

課題　二つの文章を読み比べ、例示は主張を伝える上で、どんな効果があるか考えよう

				発表用模造紙

効果
・具体的な数値
・必要な例
など

主張の説得力が増す

「論理をとらえる」ワークシート

二年　組　番　氏名（　　）

☆「モアイは語る」と「イースター島にはなぜ森林がないのか」を読み、筆者が主張を述べるための根拠とし挙げている例示を読み取り、共通点と相違点をまとめよう。また、そこから筆者の主張を考えよう。

「モアイは語る」	
共通点	
「イースター島にはなぜ森林がないのか」	

「モアイは語る」筆者の主張

「イースター島にはなぜ森林がないのか」筆者の主張

「論理をとらえる」ワークシート

二年　組　番氏名（　　）

☆「モアイは語る」「イースター島にはなぜ森林がないのか」を読み比べ、筆者が主張を述べる上での例示として挙げていることの相違点に注目し、それぞれ読み手にどんな印象を与えているか（例示の効果）を考えよう。

	例示の相違点	自分の考え	班（クラス）の考え
「モアイは語る」		《例示の効果》	
「イースター島にはなぜ森林がないのか」		《例示の効果》	

☆今日の授業を振り返って考えたことや確認できたことを書こう。

モアイは語る――地球の未来

安田喜憲

※〇数字は段落番号

①君たちはモアイを知っているだろうか。それは、人間の顔を彫った巨大な石像であり、大きなものでは高さ二十メートル、重さ八十トンにも達する。モアイは、南太平洋の絶海の孤島イースター島にある。イースター島は、日本の種子島の半分にも満たない大きさの火山島だ。この小さな島で、これまでに千体近いモアイが発見されている。

②いったいこの膨大な数の巨像をだれが作り、あれほど大きな像をどうやって運んだのか。また、あるときを境として、この巨像モアイは突然作られなくなる。いったい何があったのか。モアイを作った文明はどうなってしまったのだろうか。実は、この絶海の孤島で起きた出来事は、わたしたちの住む地球の未来を考えるうえで、とても大きな問題を投げかけているのである。これまでにわかってきたイースター島の歴史について述べながら、モアイの秘密に迫っていきたい。

③絶海の孤島の巨像を作ったのはだれか。なぞがなぞを呼び、宇宙人がやって来て作ったのではないかという説まで飛び出した。しかし、最近になって、それは西方から島伝いにやって来たポリネシア人であることが判明した。墓の中の化石人骨の分析や、彼らが持ってきたヒョウタンなどの栽培作物の分析から明らかになったのだ。さらに、初期の遺跡から出土した炭化物を測定した結果、ポリネシア人が最初にこの島にやって来たのは、五世紀ごろであることも明らかになった。

④そのころ、人々はポリネシアから運んできたバナナやタロイモを栽培し、豊かな海の資源を採って生活していた。そして、十一世紀ごろ突然巨大なモアイの製造が始まる。同じ時期に、遺跡の数も急増しており、この島の人口が急激に増加を始めたことがわかる。人口は百年ごとに二倍ずつ増加し、十六世紀には一万五千から二万に達していたと推定されている。

⑤大半のモアイは、島の東部にあるラノ・ララクとよばれる石切り場で作られた。このラノ・ララクには、モアイを作るのに適した軟らかい凝灰岩が露出していたからである。人々は硬い溶岩や黒曜石でできた石器を使って、モアイを削り出した。

⑥削り出されたモアイは、海岸に運ばれ、アフとよばれる台座の上に立てられた。このとき初めて、モアイに目の玉が入れられた。アフの上のモアイは、大抵の場合、陸の方に向けて立てられた。それは、モアイがそれぞれの集落の祖先神であり、守り神だったからだと考えられる。人人はいつもモアイの目に見守られながら生活していたのであろう。

⑦それにしても、ラノ・ララクの石切り場から、数十トンもあるモアイをどのようにして海岸のアフまで運んだのだろうか。石ころだらけの火山島を十キロも二十キロも運ぶには、木のころが必要不可欠である。モアイを台座のアフの上に立てるときでも、支柱は必ず必要だ。

⑧しかし、現在のイースター島には、オーストラリアから持ってきて最近植栽したユーカリの木以外には、森は全くなく、広大な草原が広がっているだけである。モアイが作られた時代、モアイの運搬に必要な木材は存在したのだろうか。

⑨このなぞを解決したのが、わたしたちの研究だった。わたしはニュージーランドのマセイ大学J・フレンリー教授とともに、イースター島の火口湖にボーリングをして堆積物を採取し、堆積物の中に含まれている花粉の化石を分析してみた。すると、イースター島にポリネシア人が移住した五世紀ごろの土の中から、ヤシの花粉が大量に発見されたのだ。このことは、人間が移住する前のイースター島が、ヤシの森に覆われていたことを示している。

⑩まっすぐに生長するヤシの木は、モアイを運ぶためのころには最適だ。島の人々はヤシの木をころとして使い、完成したモアイを海岸まで運んだのであろう。

⑪わたしたちの花粉分析の結果から、もう一つの事実も浮かび上がってきた。ヤシの花粉の量は、七世紀ごろから、徐々に減少していき、代わってイネ科やタデ科などの草の花粉と炭片が増えてくる。このことは、ヤシの森が消滅していったことを物語っている。人口が増加する中で家屋の材料や日々の薪、それに農耕地を作るために伐採されたのだろう。さらに、モアイの製造が始まると運搬用のころや支柱としても使われるようになり、森がよりいっそう破壊されていったのだと考えられる。

⑫ラノ・ララクの石切り場からは、未完成のモアイ像が約二百六十体も発見された。なかには作りかけの二百トン近い巨像もあった。運ぶ途中で放棄されたモアイも残されている。おそらく森が消滅した結果、海岸までモアイを運ぶことができなくなったのであろう。

⑬では、モアイを作った文明は、いったいどうなったのだろうか。

⑭かつて島が豊かなヤシの森に覆われていた時代には、土地も肥え、バナナやタロイモなどの食料も豊富だった。しかし、森が消滅するとともに、豊かな表層土壌が雨によって浸食され、流失してしまった。火山島はただでさえ岩だらけだ。その島において、表層土壌が流失してしまうと、もう主食のバナナやタロイモを栽培することは困難となる。おまけに木がなくなったため船を造ることもままならなくなり、たんぱく源の魚を捕ることもできなくなった。

⑮こうして、イースター島は次第に食料危機に直面していくことになった。その過程で、イースター島の部族間の抗争も頻発している。人口が増加する中で家屋の材料や日々の薪、それに農耕地を作るために伐採されたのだろう。さらに、モアイの製造が始まると運搬用のころや支柱としても使われるようになり、森がよりいっそう破壊されていったのだと考えられる。

⑯イースター島のこのような運命は、わたしたちにも無縁なことではない。

⑰日本列島において文明が長く繁栄してきた背景にも、国土の七〇パーセント近くが森で覆われているということが深くかかわっている。日本列島だけではない。地球そのものが、森によって支えられているという面もある。森林は、文明を守る生命線なのである。

⑱現代のわたしたちは、地球始まって以来の異常な人口爆発の中で生きている。一九五〇年代に二十五億足らずだった地球の人口は、半世紀もたたないうちに、その二倍の五十億を突破してしまった。イースター島の急激な人口の増加は、百年に二倍の割合であったから、いかに現代という時代が異常な時代であるかが理解できよう。

⑲このまま人口の増加が続いていけば、二〇三〇年には八十億を軽く突破し、二〇五〇年には百億を超えるだろうと予測される。しかし、地球の農耕地はどれほど耕しても二十一億ヘクタールが限界である。そして、二十一億ヘクタールの農耕地で生活できる地球の人口は、八十億がぎりぎりである。食料生産に関しての革命的な技術革新がないかぎり、地球の人口が八十億を超えたとき、食料不足や資源の不足が恒常化する危険性は大きい。

⑳絶海の孤島のイースター島では、森林資源が枯渇し、島の住民が飢餓に直面したとき、どこからも食料を運んでくることができなかった。地球も同じである。広大な宇宙という漆黒の海にぽっかりと浮かぶ青い生命の島、地球。その森を破壊し尽くしたとき、その先に待っているのはイースター島と同じ飢餓地獄である。とするならば、わたしたちは、今あるこの有限の資源をできるだけ効率よく、長期にわたって利用する方策を考えなければならない。それが、人類の生き延びる道なのである。

イースター島にはなぜ森林がないのか

鷲谷　いづみ

※○数字は段落番号

①チリのイースター島は、首都サンティアゴから西に約三千八百キロメートルはなれた、太平洋にうかぶ絶海の孤島である。島の面積は約百六十平方キロメートルで、香川県の小豆島と同じくらいの広さである。モアイ像で有名なこの小さな島は、無数の火口が残る火山島でもある。

②現在、この島に森林はほとんど見られない。しかし、島に残る遺跡の調査と「花粉分析」の結果、ポリネシア人たちが初めてこの島に上陸した西暦四〇〇年ごろには、島全体が森林におおわれていたことが明らかになった。

③イースター島の森林は、なぜ、どのようにして失われてしまったのだろうか。二つの調査の結果から、おおよそ次のような流れであったと考えられる。

④今から約千六百年前、ポリネシア人たちが、それまでだれ一人として人間が上陸したことのなかったイースター島に上陸したとき、島はヤシ類の森林におおわれていた。いずれの大陸からも遠く離れたこの島には、ほ乳動物は生息せず、空を自由に飛ぶことのできる鳥類が数多く住み着いていた。

⑤ほ乳動物が生息していなかったのは、太平洋のまっただ中に火山の噴火でできたこの小さな島に、泳いでたどり着くことのできるほ乳動物がいなかったからである。

⑥ポリネシア人たちは、イースター島にたどり着いた初めてのほ乳動物だったといってもよいのだが、実はそのとき、もう一種類、別のほ乳動物が、ひそかに上陸していたのである。それは、ポリネシア人たちが、長い航海の間の食料とするために船に乗せていた、ラットである。

⑦島に着いた船から逃げ出したラットは、この島で野生化し、またたく間に島じゅうに広がっていったらしい。やがて、このラットの子孫が、ポリネシア人たちの子孫と島をおおう森林に大きなわざわいをおよぼすことになる。だが、長い船旅の末ようやくこの島にたどり着いたポリネシア人にとって、ラットの船からの逃走など、ほんのささいな出来事であったにちがいない。

⑧イースター島から森林が失われた大きな原因は、この島に上陸して生活を始めた人々が、さまざまな目的で森林を切り開いたことである。

⑨まず、農地にするために森林が切り開かれた。

⑩安定した食料生産を行うためには、農作物を栽培するための農地を開こんしなければならない。「花粉分析」の結果、島の堆積物の中に含まれる樹木の花粉が時代とともにしだいに減少したことが明らかになっている。

⑪次いで、丸木船をつくるために、森林から太い木が切り出された。

⑫イースター島が緑の森林におおわれていたころ、森林には丸木船をつくるのに十分な太さのヤシの木がたくさん生えていた。その木を切りたおしてつくった丸木船をこいで、島の漁師たちは、サメなどの大きな魚をとらえていたのである。また、島に住む人々は、この丸木船に乗って、島から四百キロメートルも離れた無人島まで行き、そこに生息する無尽蔵ともいえる海鳥をとらえて食料にすることもできた。

⑬さらに、食料生産とのかかわりが深いこれらの目的に加え、宗教的・文化的な目的でも森林が伐採された。イースター島では、祖先を敬うために、火山岩の巨石に彫刻をほどこす宗教文化、すなわち、モアイ像の製作がさかんになった。

⑭モアイ像は、高さが三メートルから十メートルもあり、重さは三トンから十トンにもおよぶ。中には、高さ二十メートル、重さ五トンに達するものまである。

⑮モアイ像は、島の石切り場から切り出された巨大な火山岩を、ノミでけずって作られる。そして、ときには十数キロも離れた所まで運ばれ、てこを用いて立てられた。このモアイ像を、石切り場から運ぶために森林がぎせいとなった。重さが何トンもある巨大な像を転がしてゆくのに必要なころを作るために、森林から木が切り出されたのである。

⑯イースター島では、豊かな森林の恩恵を受けて、高度な技術を誇る巨石文化が栄えた。西暦一五〇〇年頃には、人口は七千人に達していたと推定されている。

⑰しかし、その繁栄は決して長くは続かなかった。太い木が、切り尽くされてしまったからである。

⑱森林から太い木を伐採したとしても、絶えず新しい芽が出て、順調に成長していたとしたら、森林には常に太い木が存在し、人々の暮らしに必要な材木も持続的に供給されたはずである。しかし、イースター島では、ヤシの木の森林が再生することはなかった。

⑲人間とともに島に上陸し、野生化したラットが、ヤシの木の再生をさまたげたらしいのだ。

⑳ラットは、人間以外のほ乳動物のいない、すなわち、えさを奪い合う競争相手も天敵もいないこの島で、爆発的に繁殖した。そのラットたちがヤシの実を食べてしまったために、新しい木が芽生えて育つことができなかったようなのである。

㉑このようにして、三万年もの間自然に保たれてきたヤシ類の森林は、伐採という人間による直接の森林破壊と、人間が持ち込んだ外来動物であるラットがもたらした生態系への影響によって、ポリネシア人たちの上陸後、わずか千二百年ほどで、ほぼ完璧に破壊されてしまったのである。

㉒一七二二年に、初めてヨーロッパ人が島を訪れたとき、島の繁栄も、豊かな森林も、すでに過去のものとなっていた。木は切り尽くされて森林はなく、その結果、むき出しとなった地表の土が雨や風に流され、畑はやせ細っていたのである。

㉓農業生産がふるわないだけではない。漁に必要な丸木船を作る材木がなくなってしまったため、かつてのように、魚や海鳥をとることもできなくなっていたのである。

㉔当然のことながら、島は深刻な食料不足におちいっていった。食料を奪い合う村同士の争いが絶えず、島の人口も、最も栄えていたころの三分の一にまで減少していた。

㉕高度な技術や文明が、豊かな自然の恵に支えられて発達したのだとしたら、このイースター島の歴史から、私たちが教えられるのは次のようなことである。すなわち、ひとたび自然の利用方法を誤り、健全な生態系を傷つけてしまえば、同時に文化も人々の心も荒れ果ててしまい、人々は悲惨で厳しい運命をたどる、ということである。

㉖モアイ像は、西暦一〇〇〇年から一六〇〇年頃の間に作られたとされている。祖先を敬うためにモアイ像を作った人々は、数世代後の子孫の悲惨なくらしを想像することができなかったのだろうか。

㉗祖先を敬う文化はさまざまな民族に共通であるが、数世代後の子孫の幸せを願う文化は、それほど一般的ではないのかもしれない。しかし、今後の人類の存続は、むしろ、子孫に深く思いをめぐらす文化を早急に築けるかどうかにかかっているのではないだろうか。

「イースター島にはなぜ森林がないのか」

「モアイは語る」

有限な資源を効率よく長期にわたって利用する方策を考えることが、人類の生き延びる道である。

効果

効果

「イースター島にはなぜ森林がないのか」

「モアイは語る」

共通点